

え、メックル軟骨の一般的な性質についても述べた。

## 受賞講演Ⅱ

ラットの末梢自然刺激による延髄後角の侵害受容細胞の応答に及ぼす扁桃体刺激の抑制効果

關山 浩子

岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座  
歯科矯正学分野

三叉神経脊髄路核尾側核と、その内側の網様亜核から成る延髄後角で記録される侵害受容細胞は、顎顔面口腔領域からの痛覚情報を視床の後内側腹側核(VPM)や内側核に中継している。この侵害受容細胞には、侵害刺激のみに応答する特異的侵害受容(NS)細胞と、侵害刺激のみならず触刺刺激や圧刺激などの非侵害刺激にも応じる広作動域(WDR)細胞がある。これらの細胞の末梢受容野の電気刺激応答が、扁桃体の神経細胞の興奮によって抑制されることが報告されている。しかし、末梢組織の電気刺激は痛覚受容器だけではなく触圧覚受容器も興奮させるので、扁桃体刺激によるWDR細胞の電気刺激応答の抑制はどちらの入力に作用するのか定かではない。そこで本研究は、延髄後角の侵害受容細胞、特にWDR細胞の触覚、圧覚、痛覚の3種類の自然刺激応答が、扁桃体の電気刺激によってどのような影響を受けるか、また扁桃体刺激が非侵害刺激のみに応答する低閾値機械受容(LTM)細胞に影響を及ぼすかどうかを調査した。

その結果、扁桃体刺激はWDR細胞の触刺刺激や圧刺激による非侵害応答と、ピンチ刺激による侵害応答を同程度(40-60%)抑制し、それらの抑制効果は扁桃体刺激終了後200~300 msec持続することが観察された。またWDR細胞を抑制した部位の扁桃体刺激は、LTM細胞の触刺刺激応答には影響を与えないことが確認された。これらの結果は、延髄後角の2次ニューロンであるWDR細胞が扁桃体内の神経細胞の興奮によって後シナプス抑制を受けることを示唆し、さらにこの扁桃体による抑制作用は、LTM

細胞のような非侵害受容細胞には働くかず、侵害受容細胞に選択的であると推察された。ストレス反応の発現に扁桃体が中心的役割を持つことから、観察された扁桃体の興奮による侵害受容細胞の抑制効果は、行動学的に示されているストレス誘発鎮痛の神経生理学的基礎の一部を成すと考えられた。

## 一般演題

演題1. 顎顔面補綴外来における最近5年間の臨床的調査

○武部 純、村山 龍平、八重嶋彩子、  
伊藤 創造、古川 良俊、塩山 司、  
石橋 寛二

岩手医科大学歯学部歯科補綴学講座  
冠橋義歯補綴学分野  
歯科医療センター顎顔面補綴外来

目的：口腔領域における腫瘍手術後の患者は、症例に応じた顎補綴装置による補綴的リハビリテーションが重要となる。岩手医科大学附属病院歯科医療センターは、2000年8月1日に高度先進医療「顎顔面補綴」の特定承認保険医療機関として承認を受け、顎顔面補綴外来が設置された。今回、2005年1月～2009年12月までの最近5年間の顎顔面補綴外来における患者の概要を把握し、今後のさらなる補綴的アプローチの一助とすることを目的として臨床的調査を行った。

方法：2005年1月～2009年12月までの5年間に顎顔面補綴外来へ来院した63名(男性35名、女性28名)の初診登録患者(34歳～91歳)を対象とし、年齢分布、登録患者数、患者の居住地、紹介元状況、腫瘍原発部位別の症例数、補綴装置の種類と症例数の6項目について調査した。

結果：患者の年齢分布は、70歳代を中心とした高年齢層が高い割合を示し、男女比は1:0.8であった。受診患者は岩手県内84%、県外16%、紹介率は院内87%、院外13%であった。上顎欠損症例は下顎・舌欠損症例に比較して高く、上顎では部分床義歯型の顎義歯、下顎では部分床義歯が高い割合を示した。高度先進医療を適